

ジョージア (グルジア) 便り その33

『東京で踊るということ』

文 高野陽年 text by Yonen Takano



舞台上で踊る筆者

東京は世界でも指折りの目の肥えたバレエファンが多い街である。フランス、英国、ドイツ、ロシア、アメリカなどのトップカンパニーが毎年のように客演する都市は世界でも他に類を見ないだろう。ロシアバレエの中心地サンクトペテルブルグでさえ東京ほどの豪華なラインナップを揃えられることはなかった。ヨーロッパに位置し、日頃から劇場に通う習慣が人々にあるにもかかわらずだ。

その東京でも上野公園の中の東京文芸会館は特別な場所である。「ブнкаカイカン」とヨーロッパのダンサーの中でも認知度が高く、知名度や集客力が見込める限られたバレエカンパニーの

みが踊る機会を得る。

僕はこれまで、マリインスキー劇場、ポリシヨイ劇場などヨーロッパの主要な劇場の舞台を踏んできた。しかし東京文化会館

においては、厳しくも温かい東京の観客のひとりとして客席を隅々まで把握し、どこのトイレが空いているか熟知し、二階の精養軒のハンバーグの味は知っているが、舞台の上には一度も立つことがなかった。それほど東京で踊るといふことは特別なのだ。

ついにこの春僕も逆輸入という少し変わった形で『ブнкаカイカン』においてダンサーデビューを果たすことになった。しかもニューヨークのアメリカンバレエシアターやポリシヨイ劇場のトップダンサー、そしてジョージアの名花アナニアシヴィリとともに舞台を踏む。超一流の舞踊家と肩を並べてと言うとおこがましいかもしれないが彼らに並び準ずる形で主要な踊りを踊る。これがダンサーにとっていかに名誉なことであるか。と同時に厳しい視線を送られる宿命でもある。かつての僕がそうであったように一流のダンサーを見慣れてきたこの観客はちよつとのことでは満足しない。今回も僕らの一週間前はパリオペラ座が『ブнкаカイカン』で公演を行うようだ。オペラ座と比べられ、批評される。こ

れはかなりのプレッシャーである。けれども大きなプレッシャーと緊張感は舞台人にとって必要不可欠なもので、自分の踊りを昇華させる重要な要素である。

文化会館の舞台裏の柱はコンクリートの打ちっ放しによるスタイリッシュなデザインのだが、そこには世界各国の著名な演奏家、オペラ歌手、ダンサーのサインやメッセージが落書きのように柱を隙間なく埋め尽くしている。その中には伝説的な憧れのダンサーの名前もある。僕も東京公演を重圧の中成功させて、大きく『高野陽年』と東京文化会館に落書きしようではないか。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

